

## Electroneurography において他神経由来の CMAP 混入を認めた症例の特徴

◎岡崎 愛志<sup>1)</sup>、榎谷 愛<sup>1)</sup>、太田 佑衣<sup>1)</sup>、田中 恵美子<sup>1)</sup>、久保田 芽里<sup>1)</sup>、和田 晋一<sup>2)</sup>  
学校法人 大阪医科薬科大学 大阪医科薬科大学病院<sup>1)</sup>、学校法人 天理よろづ相談所学園 天理医療大学<sup>2)</sup>

【はじめに】Electroneurography (ENoG) は顔面神経の変性の程度を客観的に評価することができ、末梢性顔面神経麻痺の予後推定に重要である。しかし、刺激が顔面神経より深部の三叉神経まで波及した場合、表情筋より早期に咬筋由来の CMAP (アーチファクト) が出現するため、ENoG 値の算出を誤る恐れがある。今回、顔面神経由来以外の CMAP 混入を認めた代表的な 3 症例の特徴を考察する。

【方法】顔面神経麻痺発症後 10~14 日目に ENoG を実施し、健側、患側それぞれ正中法、一般法、鼻筋法で同時に CMAP を導出した。原則、40mA で顔面神経本幹を刺激し、ENoG 値は患側 CMAP/健側 CMAP×100 (%) で算出した。

【症例 1】30 歳台女性、BMI16.0、Bell 麻痺。ENoG にて健側、患側正中法で早期に CMAP の立ち上がりを認めた。健側、患側ともに明らかに立ち上がり潜時が早くアーチファクトの混入と考え、刺激強度を下げ、影響の少ない刺激強度で評価した。

【症例 2】70 歳台女性、BMI15.7、Hunt 症候群。ENoG にて患側正中法で健側より早期に CMAP の立ち上がりを認め

た。アーチファクトの混入と考え、刺激強度を下げ、影響の少ない刺激強度で評価した。

【症例 3】70 歳台女性、BMI16.8、Hunt 症候群。ENoG にて患側正中法で健側より早期に CMAP の立ち上がりを認めたが、顔面神経由来の CMAP は認めなかった。刺激強度を下げアーチファクトを除去するも顔面神経由来の CMAP は認めなかった。刺激強度を上げるとアーチファクトのみ大きくなり、顔面神経由来の CMAP は導出されなかった。

【考察】今回の 3 症例では早期に CMAP を認め、咬筋由来のアーチファクトの混入を認めた。いずれも痩せ型のため、刺激が三叉神経へ波及しやすかったと考えられた。

ENoG 実施の際は、立ち上がり潜時を記録し、アーチファクトを見極めることが重要と考える。特に患側で健側より早期に CMAP の立ち上がりを認めた場合には、他神経由来の CMAP の混入を疑い、適切な刺激強度で ENoG 値を算出することが重要である。

連絡先：072-683-1221 (内線 3326)